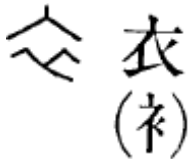
衣食住に関する部首



衣は、上衣の象形で、“着物”を表わした字です。音は漢音がイ、呉音がエ。部首としては衤（衣扁）が多く、亠と衣と上下に分けて使われるものもあります。

表は で、毛と衣との会意字です。毛皮の着物で、毛のある方が“おもて”です。“おもて”が本義で、“おもてに出す”つまり“あらわす”という意味にも使います。表面、表記、表現。

裏は、内側の意味の里（城郭の内）と衣との会意形声字で、“着物のうら”が本義の字です。転じて、広く“うら”の意味に使われます。裏面、暗々裏。

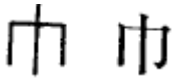
衷は、“衣の中”という意味の会意形声字で、音は中（チュウ）です。“ふところ”。転じて“心”の意味にも使われます。また、単に“中”の意味にも使われます。衷心、衷情、折衷。

裂は、切り分ける意味の列（レツ）と衣との会意形声字で、衣類を仕立てるに当たって“布を切りさく”こと。転じて、広く“さける”意味に使われます。分裂、破裂。

装は、壮大の意味の壮（ソウ）と衣との会意形声字で、“りっぱな着物”という意味の字。“よそおい”。盛装、服装、装備。

被は、体の外側を包む意味の皮（ヒ）と衣との会意形声字で、“体を包む衣類”の総称。被服、外被、転じて、“おおう”“ごうむる”。被害、被告。

製は、刀で断ち切る意味の制（セイ）と衣との会意形声字で、“衣服を裁断する”意味の字。転じて、広く“物を作る”意味に使います。製本、製鉄、製紙、作製。



巾は、布で物を覆う形の冂と糸すじ丨との会意字で、“ぬのぎれ”を表わした部首です。音は僅（キン）です。布巾、頭巾。

布は、父（フ）の省略した形の乂と巾との会意形声字で、“父用の巾（ぬの）”という意味の字です。昔は、“上質の麻ぬの”を布と言ったのですが、今は広く“ぬの”の意味に使います。転じて、“敷く”意味に使います。綿布。布設

帛は、“白い布”という意味の、白（ハク）と巾との会意形声字です。白い厚手の絹で、昔は礼物の贈答によく使われました。布帛。

希は、“交（コウ）と巾との会意形声字です。交は糸の交差した象形で、“刺繍を施した、飾りのある巾（ぬの）”という意味の字です。こういう美しい布は僅かしか作れませんので、“少ない”という意味に使われます。「希少し，希有（けう）」。また、だれもがほしがるので“のぞむ”という意味にも使われます。希望。

帳は、長（チョウ）と巾との会意形声字で、“長い布”が本義の字です。商店で、お金を勘定する所に、外から見えないように長い布を垂らしました。これを帳場と言います。帳場で使う書きつけが「帳簿」です。帳簿の数字を“帳づら”と言います。漢字で表わすと「帳面」です。帳面は帳場で使うものですが、今ではノートの意味に使われています。

席は、庄と巾との形声字です。昔は、床の上に布を敷き、そこに坐りました。これが席です。座席、出席。

帯は、世と腰に結ぶ紐を表わす冖と巾の会意字です。昔の人は、七つ道具を腰のまわりにぶら下げました。これが世です。帯は、七つ道具や手拭を“身につける”という意味の字です。“身におびる”ことから転じて“おび”の意味になりました。携帯、帯剣、帯革。

帝は、天帝を祭る時に、捧げ物を載せる机の象形で、これによって“天帝”そのものを表わしたものです。後、天子の称号になりました。

帥は、小高い丘の象形である𠂤（𠂤）と巾との会意形声字。軍隊は、丘の周囲に集合するので、𠂤（タイ）は「軍隊」の意味に転用されます。巾は軍を指揮するための小旗。帥は、“軍隊の指揮者”のことです。統帥、元帥。音は、𠂤（タイ）が変化してスイ。

師は、軍隊の意味の𠂤と、止まる意味の帀（シ）との会意形声字で、軍隊が駐留する”のが本義。転じて「軍団」「軍の指揮官」「教師」の意味になりました。王師（王の軍隊）。

帆は、風をあらわす凡（ハン）と巾との会意形声字で、“風を受けて進むための舟のほ”を表わしています。

糸は、繭から取った糸をより合わせた象形字です。音はシです。製糸工場。

細は、糸と田（サイ）（思の田で⊗、音は si ）との形声字です。西“いと”という意味が、“はそい”という意味を表わしているのです。糸 si も細 si も元来は同じ意味であり、同じ発音なのです。細小。転じて“こまかい”。細字、細胞。

系は、𢆶で、“二本の糸をつなぐ”という意味の会意字。音は繋（ケイ）。転

じて“家のつながり”“血のつながり”の意味。家系。

糾は、糸をより合わせた象形糾の糾（キュウ）と糸との会意形声字で、“糸をより合わせる”こと。糾合。また“糸がからみつく”。紛糾。転じて紛糾したものを解くために“ただし調べる”。糾明。

約は、物を包んだ形の勺（シャク）と糸との会意形声字、“包んだものを糸でくくる”こと。“ひきしめる”ことから「倹約」「節約」という使い方が生まれました。

納は、“外で乾かした糸を内にしまう”という意味の会意形声字で、音は内（漢音はダイ、呉音はナイ）が変化して、漢音はトウ、呉音はノウ。納入、出納（スイトウ）。

純は、屯（ジュン）と糸の形声字で、他の糸を交じえない「純粋の生糸」のこと。転じて、“まじりけのない”意味に用います。純毛、純良。

紋は、模様の意味の文（モン）と糸との会意形声字で、“織物の模様”が本義。わが国では、家系を表わす「紋章」の意味に使います。

紛は、糸が分かれて“入り乱れる”という意味の、分（フン）と糸との会意形声字。緒（いとぐち）が“まぎれ”てわからないことです。紛糾、紛失。

素は、まだ彩色しない“生糸”のこと。転じて、“もとのまま”“しろい”“飾りけない”などの意味に使われます。素質、平素、元素、素朴。

累は、纍が正字。畾（ライ）は、雷の本字で、雷鳴の“重なり続く”意味の字。累は、“糸を重ねる”こと、転じて、広く“物を重ねる”意味に使います。累計、累代。「累卵」は卵を重ねることで、大変危険なことの譬えに使う言葉です。音は畾（ライ）が変化してルイ。

塁は、壘が本字。“土を高く積み重ねる”ことで、“とりで”“城壁”のことです。今は野球で「一塁」「二塁」と使います。昔の言葉で言えば、「一の丸」「二の丸」「本丸」に当たります。

継は、繼が本字。“切れ切れ（𢆶）になった糸を一本の糸にする”という意味の字で、“つなぐ”ことを表わしました。継続。

断は、𢆶と斤（おの）で、“糸をばらばらに切断する”ということを表わした字です。転じて“思い切りよく”処置すること。決断、判断、英断。

続は、續が本字。賣は属の意味の部首。“切れた糸をつなぐ”こと。連続、続出。

読は、讀が本字。“言葉をつなぐ”という意味で、“本をよむ”ことを表わした字です。言葉を切れ切れに読んだのでは“読”とは言えません。

網は、冂と糸と亡の会意形声字です。冂は で、鳥を抽える“かすみあみ”の象形です。“糸を材料にして作ったあみ”という意味の字です。亡(モウ)は音を表わしたものです。

綱は、岡(コウ)(大きな鳥あみ)の糸という意味で、“太いつな”を表わした字です。「大綱」。「綱紀」は“人をしめくくる”意味で、“物事のきまり”“規則”のことです。

岡は、冂と山の会意字で、“山の上に張った大きな鳥あみ”が本義の字で、転じて、あみを仕かける“おか”の意味になりました。

繕は、“糸で善くする”という意味の字で、善と糸の会意形声字です。“破れをつくろう”こと。修繕。

結は、吉(キツ)と糸との会意形声字で、“切れた糸をつなぐ”ことです。繕と同じように、“糸で吉(よ)くする”という意味の字です。音は吉(キツ)が変化してケツ。連結。

縫は、合うという意味の逢(ホウ)と糸との会意形声字で、“糸で布をぬい合わせる”ことを表わしました。裁縫。

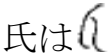
絹は、繭の意味の (ケン)と糸との会意形声字で、“繭から取ったきぬ糸”という字です。

綿は、“帛を糸でつなぎ合わせる”という意味の字で“連なり続く”が本義。連綿。また繭を広げて引き伸ばし、これを何枚も重ね合わせて作った“まわた”をも言います。真綿。転じて、“木綿(もめん)わた”を言うようになりました。

緊は、堅(固)の意味の臤(キン)と糸との会意形声字で、“糸でかたくしめる”という意味を表わしています。緊密、緊張。

線は、流れのつきない泉(セン)と糸との会意形声字で、“長く続いた糸”という意味を表わしています。線路、電線、光線。

縮は、ひと所に集まる意味の宿(シュク)と糸との会意形声字です。昼は散って広がっていた人が夜になるとひと所に集まります。その意味を取って、“ちぢむ”意味を表わしたのが縮です。糸がちぢむのが本義。縮図、圧縮。

紙は、氏(シ)と糸との会意形声字。氏は  で食事に使うナイフの象形です。氏は紙の“うすい”意味を表わしています。糸は、材料を表わしています。

絵は、色を表わす糸(紅(あか)、紫(むらさき)、紺(あお)、緑(みどり))と会(カイ)との会意形声字です。“いろいろな色を会わせる”という意味の字です。漢音はカイ、呉音は

エです。エを訓だと思いやすいのですが、この字には訓はありません。

紅、紫、紺、緑など、色の名に糸が用いられるのは、色彩が糸や布によって発達したためです。

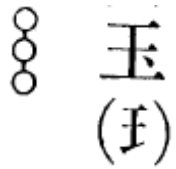
つまり、「紅」は、色そのものの名というよりも、“赤く染められた糸”に対する名称と考えるべきでしょう。これらはみな形声字になります。

終は、一年の終りを表わす冬（トウ）と糸との会意形声字で、“糸のおわり”を表わした字です。

“糸どめ”“玉むすび”が本義ですが、今は、糸に関係なく、“物事のおわり”という意味に使われています。音は冬（トウ）の変化したシュウです。

練は、練が本字です。柬は束と八との会意字で、“束の中から良い物を選び分ける”という意味の字です。練は、“束ねた沢山の糸の中から、選び出した品質の良い糸”という意味の字です。糸を煮て“ねる”と糸がやわらかく光沢も出るので、“ねり糸”と言います。また、“糸をねる”ことから転じて、広く“きたえる”意味に使われます。訓練。

玉は、三つの玉をひもで連ねたものの象形です。点が右下に付い



ているのは、この字が王（おう）と同じ字形なので、区別するために、あとから加えたものです。扁の場合は、玉の意味がよくわかるので、点を付けませんが、王扁（おうへん）ではありません。音はギョク、またはキュウ。

球は、玉のキュウという音を表わす求を加えた形声字です。地球から始まって、野球、気球、電球、眼球など多く使われる字です。

珠は、朱（シュ）と玉との会意形声字で、“赤い玉”が本義です。今は、色に関係なく用いられています。真珠、金銀珠玉。

環は、まるく取り囲む意味の𦍒と玉との会意形声字です。まるい輪の形をした、中空の玉です。輪になっている所から、“とりかこむ”「環境」、“まわる”「循環」などとも使われます。

現は、見（ケン）と玉との会意形声字で、暗い所でも玉が輝いて見えるという意味で、“はっきり見える”ことを表わした字。“あらわれる”こと。出現。転じて、“今”という意味に使われます。現在、現代。

理は、田んぼのあぜ道の意味の里（リ）と玉との会意形声字です。“玉の表面に見えるすじ模様”を表わした字です。転じてこのすじ模様をうまく生かして美しい玉をこしらえる意味になりました。

“玉をととのえる”こと。さらに転じて、「料理」「理髪」などとも使います。また、“すじ道”の意味で、道理、理論。

班は、“二つに切り分けられた玉”という意味の、玉と刂（刀）との会意字。音は半分にする意味の判（ハン）。今では、単に“分ける”意味に使われます。「班田収授」。また小分けしたものの称。新聞班、映画班。

食は、食器に食べ物を盛った形に、ふたをあわせて象った字です。△（シュウ）は、この字の音を表わす部首でもあります。

飲は、口を開いた形を表わした欠と食との会意字で、“食べ物をのみこむ”意味を表わした字です。

飯は、毎日定時に反復して食べる物という意味で“主食であるめし”を表わしたもの。反と食との会意形声字です。

飼は、“食事を司どる”という意味の字で、“食べ物の用意をする”ことです。転じて動物にえさを与えること、“動物をかう”意味に使われます。飼育、飼料。

饑は、“少ない”または“危い”意味の幾（キ）と食との会意形声字で、“食べ物が少ない”“うえる”という意味の字です。饑饉。

飢は、幾（キ）の意味の几と食との会意形声字で、饑と同音同義の字です。飢饉。

饉は、僅かの意味の堇（キン）と食との会意形声字で、飢や饑と同義の字です。

館は、家の意味の官（カン）と食との会意形声字で、“食事のできる家”のこと。旅館。転じて“大きな建物”の意味に使われています。

養は、美の意味の羊（ヨウ）と食との会意形声字で、“りっぱな食事”という意味の字。栄養。転じて、“体をやしなう”こと。養育、扶養。

余は、餘が本字。与える意味の余（ヨ）と食との会意形声字。人に与えるほど食べ物があるということは、“あまる”ほどあることを意味しています。

酉は、酒を入れる“かめ”の象形で、酒に関する字の部首に用いられます。旁の場合は「酒旁（さけづくり）」と呼ばれていますが、扁の場合は「酉扁（とりへん）」と呼んでいます。酉の字が十二支の“とり”に当たるので、この名がありますが、意味の上では、“とり”に全く関係ありません。

酒は、“酒がめに入れた液体”という意味の字で、“さけ”を表わして

います。

醉は、醉が本字。終わる意味の卒と酒との会意形声字で、“酒を飲み終わる”という意味になります。“酒によう”ことを表わしています。音は卒(スイ)。「麻醉」「心醉」という使い方もあります。

醜は、“酒を飲んで醉うとだれでもみにくくなるが、みにくい鬼が酒を飲んだら、どんなにみにくくなるだろう”という意味で、“みにくい”ことを表わした字です。音は酒(シュウ)。

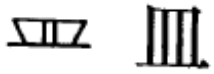
酷は、苦い意味の苦と同音の告と酉との会意形声字で、“きつい酒”を表わしています。転じて、広く“ひどい”“きびしい”という意味に使われます。酷暑、残酷。酷も苦も現代中国音は同じ ku です。

酵は、孝(コウ)と酒の形声字で、酒を醸造する時“わき立つ”ことを言います。発酵。発酵作用を起こす菌が「酵母菌」です。

酌は、水をくむ意味の勺(シャク)と酒との会意形声字で、“酒をくむ”こと。晩酌。

配は、妃(ハイ)(つれあい)の意味の己と酒との会意形声字。“さし向かいで酒を飲む”という意味の字。転じて、“酒を分ける”“くばる”意味に使われるようになりました。配分、配達。また、妃の意味で「配偶」という言葉もあります。

酬は、めぐる意味の周(シュウ)の仮借の州と酒との会意形声字で、“さかずきをまわす”こと。転じて、“返杯”の意味から“返礼”の意味が生まれました。献酬、応酬。



皿は、食物をのせる平たい“さら”の象形字です。脚として用いられることの多い部首です。音はベイ。

益は、水という字を横にした水と皿との会意字で、皿にもった水が盛りあがって見えるという意味の字です。“あふれる”が本義ですが、“ふえる”“もうけ”の意味に転用され、本義のためには「溢」が作られました。

盛は、りっぱな意味の成(セイ)と皿との会意形声字で、“皿にりっぱな食べ物をもる”ことを表わした字です。“りっぱ”という意味と、“もる”という意味と“さかん”という意味とあります。盛装、山盛り、盛大。

盗は、盗が本字です。盛られた御馳走を見て口からよだれを出すのが“次”です。盗は、思わず“ぬすみ食い”をすることです。転じて、人の目をかすめて“ぬすむ”ことに使われます。

盟は、昔、諸侯が条約を結ぶ時、牛の耳から血を取り、これをすすって約束に背かないことを神に誓い合いました。これが盟で、「同盟」という言葉ができました。この時、盟主が牛の耳を取るので、一般に指導的立場に立つことを“牛耳を取る”というようになりました。血を皿に盛るので、血という字は皿の上に血のしるしを加えて作りました。盟は、明(メイ)と皿との会意形声字です。

盤は、搬の意味の般(ハン)と皿の会意形声字で“運搬に便利なように両端に柄のついた、大きな皿”のことです。「水盤」「基盤」「円盤」などとも使われるようになりました。

搬は、舟で運ぶ意味の般(ハン)と手との会意形声字で、“手で物を運ぶ”意味を表わしました。

盆は、分(フン)と皿との会意形声字で、音は、分(フン)が変化してボン。“銘々に分けて食べ物を盛る皿”という意味の字です。銘々皿。わが国では、食器を載せる台のことを言います。

宀は、屋根のある家の象形字です。家の意味のほかに、“上から覆う”意味の部首として使われているものもあります。

家は、豕(ぶたの象形、豚の本字)と宀との会意字。中国では、どの家でも豚を飼っていたので、この字ができました。

宿は、ベッドの象形の百と人と宀との会意字で“家の中のベッドに人が休む”意味を表わしています。

室は、“人の至(いた)り止まる家”という意味で、至(シ)と宀との会意形声字です。音は至(シ)がつまってシツ。“へや”のことで、「居室」「浴室」「暗室」などと使います。

至は、 で、鳥が飛んで、地上に舞い下りる形を表わしたもので、地上に“いたる”という意味を表わしています。今は、“いたって”という副詞に使われることが多く、動詞の“いたる”のためには“到”ができました。至急、至近、到着、到達。

宮は、躬(キュウ)(身体)の意味の呂と宀との会意形声字で、“身体を休める家”という意味の字です。“りっぱな住居”の意味に使われています。宮殿、宮城、神宮。訓の“みや”は“御屋(みや)”または“御家(みや)”の意味です。宮は、漢音がキュウ、呉音はグウ。

完は、元首の意味の元(ガン)と宀との会意形声字で、“元首の住む家”という意味の字です。“欠けた所のないりっぱな家”ですから、「完全無

欠」という使い方が生まれました。

宗は、神霊の意味の示と宀との会意字で“先祖代々の霊を祭ってある家”、つまり、“本家”を表わした字です。本家は頼りになる、尊敬すべき家なので、“たっとぶ”意味に使われます。宗家、宗祀。

察は、祭と宀との会意形声字で、音は祭(サイ)がつまってサツとなりました。先祖の祭りは、昔は極めて重要なものとされ、万事に手落ちのないように慎重に行なわれました。それで、祭に“念入りに見る”“しらべる”という意味を託したものです。観察、視察。

安は、女と宀との会意字で、“家に女がいれば安心していられる”という意味で、心の“やすらか”なことを表わした字です。安息、平安。

定は、正の変形した疋と宀との会意形声字で、“家の中を正しく治める”という意味の字です。論語に「席正しからざれば坐せず」とありますが、正しきにおることが、身心ともに安定(“さだまる”)するゆえんです。音は正(セイ)がなまってテイ。

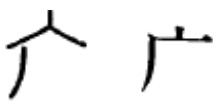
宝は、宝玉の意味の玉と宀との会意字で“たから物”を表わしたものです。玉は代表的な財宝で、家に大切に保存しておくべき物だというので、玉を宀で包みました。

実は、實が本字です。財宝の意味の貝が家にいっぱいあることを表わした字で、“みちる”という意味が本義です。充実。転じて、“みのる”“み”の意味に使われています。果実、事実。

宅は、托(タク)の意味の乇(タク)と宀との会意形声字で、わが身を“托する家”という意味の字です。自宅、住宅。

寡は、宀と頁と分の会意字です。寡は頒で、“分かつ”こと。寡は、“家を分かつ”のが本義の字です。分家。分家すると財産が分割されて“少なくなる”ので“少ない”意味が生まれました。「衆寡敵せず」。寡婦は、夫に分かれてひとり家に住む婦人という意味です。

宣は、へやの外の廊下を表わした亘(セン)と宀との会意形声字です。今の言葉で言えばホールに当たります。昔、朝廷では、詔(みことのり)をこの大広間である宣で伝えました。それでこれを「宣旨」と言います。また、詔勅は国民に“広く伝える”ものであるから、「宣伝」という使い方が生まれました。



广は、一方が開放されていて、自由に出入りができる大きな家の象形です。個人の住宅ではない建物を表わすのに多く用いられる部首です。

店は、お客に問放されている家の形の广と占（セン）との形声字です。音は占（セン）がなまって点（テン）となりました。占は、品物の陳列棚の象形と見ることもできます。

庫は、車を入れておく“車庫”を表わした字です。今では、広く“物を入れおく建物”の意味に使います。書庫、金庫、倉庫。

広は、广が“ひろい建物”という意味を表わしています。厶（コウ）と广の形声字。旧字体は黄（コウ）との形声字で廣。今は公、弘、宏のムで表わしたものです。

府は、与える意味の付と广との会意形声字です。租税として与えられた穀物を納めておく“倉庫”が本義の字ですが、今は広く“役所”という意味に使います。

付は、亻と寸（手）の会意字で、手をつける“与える”という意味を表わした字です。

度は、手を何回も広げて、“長さを計る”意味を表わした、广（広げる）と又（手）と廿との会意字です。廿は、十を横に二つ並べた形で、二十のことです。数の多いことを表わしています。昔は、両手を広げた時の長さを“ひろ”と言い“尋”と言って、これが長さをはかる単位とされたことは第２章の尋で説明しました。

“長さを計る”ことから転じて、広く“はかる”意味、また、“はかりの目もり”をも表わすようになりました。温度、角度。

庶は、家の中で火（灬）を燃やして、上になべをかけて食べ物をこしらえている象形です。平凡な庶民の生活を表わしたものであり、またそれは庶民の希望を表わしたものでもあります。“民衆”の意味、“希望”の意味に使われます。衆庶（しゅうしょ）、庶幾（望む）。

座は、すわる意味の坐（ザ）と广との会意形声字で、“家の中の人のすわる所”という意味の字です。座席。転じて“人の集まる所”という意味に使われます。名画座、講座。

坐は、土の上に人がふたりいる形の字で“すわる”という意味を表わした会意字です。普通、坐は“すわる”、座は“すわる所”の意味に使い分けられていますが、字の本義はそれはどの違いはありません。

床は、牀（ショウ）の意味の木と广との会意形声字で、“座ったり、寝たりする牀（ゆか）”を表わしたものです。

牀は、“木材を使って作った家具”を表わした字で爿（ショウ）と木の会意形

声字です。爿は木を半分にした形で をまん中から分けると、爿と片とになります。片は、独立して「片方」などと使われますが、爿は部首としてしか使われません。爿は、木を切って角材にしたり、板にしたりすることを表わしていますので、“ゆか”“寝台”“椅子”など、いろいろの意味に使われています。

底は、“傾きかかった家”の意味のと一との会意形声字で、家を安定させるために、土台につっぱりを入れることを表わしています。“家の土台”“そこ”という意味の字です。

氏は、傾きかかった柱につっかえ棒をした形を表わした字で、“ささえる（支）”という意味を表わした指事字です。支には、“分かれる”という意味がありますので、一つの家から分かれ出たもの（支）を表わすための名のりを“氏”というようになりました。

庚は、古体が で、両手できねを持つ形です。“穀物をつく”のが本義の字です。今の字体では、人をきねに見たてればよいでしょう。

庸は、庚（ヨウ）と用との会意形声字で、“きねを用いる”という意味の字です。転じて、広く“用いる”という意味に使います。雇庸、登庸。また、穀物をきねでつくことは、日常生活の常の仕事ですから、“常”の意味にも使われます。凡庸、中庸。

康は、庚（コウ）と米との会意形声字です。お米がつけるのは、幸福な状態ですから、“やすらか”の意味を表わしました。健康。

廃は、乱の意味の発と广との会意形声字で、“破れ果てて、とても住めなくなった家”を表わした字です。廃墟、廃屋。音は発が変化してハイ。

癈は、“治療しても、元通りにならない病気”“手当てのしようもない病状”を表わした字です。癈疾、癈人。（原本では「廃」が使われている。）

廊は、闌（手すり）の意味の郎（ロウ）と广との会意形声字で、“手すりのある建物”という意味の字です。中国で、堂（表座敷）の東西にあるへやが、郎をめぐらしていて廊と言いました。また、へやを結ぶ「廊下」は郎があるので、この名前があります。

門は、両方に開く扉のついた門の象形字です。“もん”が本義ですが、“家”の意味にも用いられます。家門、名門。

関は、門をとじてかんぬきをした形です。旧字体では關でした。人

が出入りできなくなりますので、“せき止める”意味を表わします。昔、通行人をせき止める所を「関所」と言いました。関東、関西は、箱根の関所を境にして。関(せき)の東、西”という意味の言葉です。

門は、“かんぬき”をかけた門の象形で、“かんぬき”のことです。

開は、かんぬきに手をかけた形の开(𦥑)と門との会意字で、“門をひらく”という意味を表わしています。転じて、広く“ひらく”意味に使います。開発、開放。

閉は、門にかんぬきをかけ、そのかんぬきが動かないように縦木を入れ、さらにその木をも動かないようにとめた形です。“門をとじる”ことです。才は、才能の才(サイ)ではありません。音は蔽(ヘイ)。

間は、閒が本字。門の間から月光がさし込むという意味で、“すきま”“あいだ”の意味を表わした会意字です。“すきま”の意味から転じて“ひま”の意味が生まれました。音は閑(カン)です。間居(閑居)。

閑は、門の内側にある横木を表わした会意字です。「闌閑」とも言います。守衛が出入りする人をここで止め、調べました。怪しい者をここで干(ふせ)ぐので、「闌干」とも言います。このため門内はみだりに人が入らないので“しずか”という意味があります。閑静。

閥は、門と伐(バツ)の形声字で、左側の門柱の名称です。門と同じように“家がら”の意味に用いられます。門閥。転じて、同郷、同窓などの間で作る団結の意味に使います。派閥、財閥。

閲は、門と兌(エツ)の形声字で、右側の門柱の名称です。昔は、ここに車馬を並べたので、“車馬を数えたり、調べたりする”ことを閲というようになりました。閲兵、検閲。

戸は、家の出入口につけてある、片開きの“と”の象形字です。音はコ。これら、家の意味に使われる字です。

房は、傍(かたわら)の意味の方(ホウ)と戸との会意形声字で、表座敷の傍に付随している部屋のことです。普通、東西にあって、「東房」「西房」と言います。“わきべや”が本義の字です。戸は、“へや”の意味を表わしています。「暖房」「冷房」などと使われます。へやは物を貯蔵しておく所であるというので、「子房」「乳房」などの使い方もあります。

肩は、開閉する意味を表わす戸と肉との会意字で、腕のつけ根の“かた”を表わしています。

扇は、開閉する意味を表わす戸と羽との会意字で、“ひらひらさせ

て風をおこす羽”、つまり“おうぎ”を表わしたものです。昔は、鳥の羽で作りました。扇子、扇風機。

戻は、戻が本字です。“犬が戸をくぐり抜けて出入する”という意味の字で、“乱暴”または“無理”をすることを表わしています。暴戻（ぼうれい）、曲戻。“道にもとる”ことです。今では“家にもどる”という使い方をしています。この意味は、わが国だけのものです。

所は、斧の象形であり、本字である斤と戸（コ）との形声字で、“斤で木を切る”のが本義の字です。戸（コ）は、木を切る時のコンコンという音を表わしたものです。この字は古くから、“処”の仮借字として“ところ”の意味に使われています。名所、住所。

雇は、鳥の意味の隹と戸との会意形声字で、“家に飼われている鳥”が本義の字です。転じて、“自分の家において養う”という意味から、“人をやとう”という意味になりました。雇傭（こよう）（用）、解雇（かいこ）。